

わしゃ、ただの 山ザルじゃ

短編

YAMANAKA TOMOTAKA

山中與隆

Duo-yamanka

わしゃ、ただの
山ザルじゃ

山中與隆

目次

わしや、ただの山ザルじや

1

編者あとがき

50

わしや、ただの山ザルじや

作 山中與隆

僕は小説家になりたいと思つているさえないフリーターだ。僕が書きたいのは動物小説だ。だから、えさを探して里に出てきては怖がられ、悪もの扱いされるツキノワグマや、山の中をうねってはしる道

路で車に轢かれていたタヌキや、畑を荒らして追っ払われるイノシシ、それから大集団になるカラスなんかについても、結構書くためのアイデアはもっているし取材した資料もたまっている。

サルについて取材したいと思って出かけたときのことだった。

あれは僕も夢かと思うくらい不思議なことだった。

さらに山奥に入ったところで、枯葉が絨毯のよう
に積もった大きな木の下で、ぽつんと一匹のサルが
すわっているのが見えた。普通サルは群れで暮らす
ものだから、僕はきつとそこいらにいったいはかの
サルたちがいるだろうと思った。だが、キーキーと
いうやかましい声もまったたく聞こえないし、それら
しい姿もない。僕はしばらく木の陰からそのサルの
ようすを見ていた。サルは長い時間じつとしていた。

僕は腰の鈴を手で押さえて音がしないようにしながらそつと近づいてみた。ところがサルは逃げようとしめない。ついに僕はサルから一メートルくらいのところにしやがみこんで観察を続けた。サルは僕に敵意がないことを感じ取ったのだろう、逃げようともしないし警戒するようすもない。それどころか僕の方を見て何か口をもごもご動かしている。はじめは何かたべているのかと思つたが、そうではないらし

い。

不思議だったのはそこからだ。僕には、そのサルが僕に向かつて何か話そうとしているように思えてきた。そう思うとだんだん僕にはサルの声にもならないような微かな声が聞こえてきた。それどころか、なんだかしやべってることの意味がわかるような気がしてきたのだ。僕はその場にあぐらをかいて、サルの話を聞くことにした。これから書くのが、その

サルが僕に聞かせてくれた身の上話だ。

『わしやここらの山で暮らすただの山ザルじやが、なかまうちじやあちよつとはならしたもんさ。というのも、わしや大ボスの女房じやつたけえの』

このサルはメスだったのだ。よくみると確かに萎びた乳首が小さく垂れ下がっている。

『その大ボスはちよつと前に人間に捕まつて殺されてしもうた。大ボスは、若いころなら人間なんかに捕まるこたあなかつたんじやがのう。あんときは群れのもんを引きつれて畑のイモをいただきにでつたんじや。いつもなら人間がまだ畑に出てこん朝早くに行くのに、その日にかぎつてもう日が高くなつてから出かけたんじや。朝までふつとつた雨が、上がつていい天気になつたけえの。それがいけんかつ

たんじやな。

わしらあ、人間が浅知恵でガラランガララン音がするもんをぶら下げたり、ときたま鉄砲みたいな音させてわしらを追っ払おうとするが、そんなもん、こけおどしちゆうことはいっぺんでわかるけえのお。いちど何の害もないことがわかったら、怖くもなんともないんじや。それも知らんで、人間どもはいつまでもそんな手を使つとる。あいつらサル知恵なんて

言葉を使うけど、わしらにいわせれば人間こそサル知恵じゃ。言い方がおかしゆうなつたかな。

まあ、それはいいんじやが、わしらがイモをほじくりはじめたら、畑のまわりにドツと人間どもが出てきたんじや。そのとき見張りをしとつたやつが、食い意地の汚いやつでのう。がまんできんで、木の上からの見張りほつたらかして畑に下りてきよつたんじや。それで人間どもの動きに気がつくの遅れた

んじやの。大ボスも若いころはあんないかげんな見張りのやりかたなんか絶対にさせたりせんかったんじやがのう。

人間どもは大きな網をわしらめがけて覆い被せてきやがった。いや、それだけなら初めてのことじやないし、たいていは網がからだに被さる寸前にスルリと逃げおおせるんじや。じやがそのとき畑のまんなかへんでイモつかんでた子ザルが逃げおくれたの

う。まあなかまの中じやあにぶい子じやったんじやが、大ボスは網がもう地面に落ちそうなのに、それをかいくぐつてその子を助けに行つたんじや。

それで大ボスとその子は捕まつてしもうた。それつきりよ。それからしばらくして畑にいつてみると、大ボスとその子の死骸が竹ざおを立てたのにぶら下げられとつた。

その子の母親は毎日人間がいなるときにその子の

下に行つて、ながいことじつとしとつたもんじや。
わしも大ボスがいなくなつたのは寂しかったけど、
薄情なようじやが、その母親みたいにする氣にやな
らんかつた。それに、大ボスがいなくなつたわしん
とこにや、若いやつらが寄つてきてのう。ボスのあ
とがまを狙うんじや。じやがわしやそんなやつらを
受け付けんかつた。

大ボスはほんまに立派なボスじやつたが、わしも

大ボスの女房に恥じないサルとして生きよう思うてのう。いやわしも若けりやそいつらを、わしの目の前で戦わせて、そいつらのうちで一番強くて、威厳のあるやつを受け入れて、もう一花咲かせるところなんじゃないが、なにせ年でのう。ボスが死んだシヨツクもあつたんじゃないや思うけど、何だかからだの具合もよくなくなつてのう。もうそんな気力はなくなつてしまふたんよ。それにボスの女房としちや、子供が生

めんことにやことにならんよ。それももう無理みたいやしのを。

いや、わしじやつて、ちよつと前までは毎年子を生んでいたんじや。でも、もう無理じやと思う。目もほとんど見えんくなつとるし。それにたいして何も食うとらんのに、これ、こんなに腹ばつかりふくれてきてのを。

それじやがのを、今じやこんな哀れなかつこうに

なつてしもうたが、こう見えてもわしや三代のボスの女房を努めたんじや。

さいしよのは若いボスじやつた。わしも若かったけえのう。そいつはからだか飛びぬけて大きくて強かった。このボスのときにわしらの群れはどんどん大きくなつたんじや。わしもこの強いボスの女房として鼻が高かった。いま考えるとずいぶん威張つていたもんじや。

わしの自慢のボスは、ずいぶん何匹ものライバルを群れから追い出したり、子分にしたりしたもんじゃない。でもボスの座を狙って戦いを挑んでくるようなやつは、ほんまは負けたからと行って子分になるよ。うじや駄目なんじや。群れを出て苦勞してでも自分の群れを作るか、もつと強くなつて帰つてきてまたボスを狙うぐらいじゃなけりやね。それくらいのをやつじゃなけりやボスになつてもやつて行けんのよ。

そういえば、いちどボスに追い出されたやつで、まいもどつてきてわしのボスに二度目の戦いをいどんできたたのもしいやつがいたのう。もつとながいこと修行してくりやあもうちよつとは相手になつたと思うんじやが、追い出されてからあんまり月日がつたつとらんかつたけえのう。わしのボスもぜんぜん衰えちよらんし、そいつもたいして前より強くなつちよらんかつたんじやのう。わしのボスにいちころ

で、また追い出されてしもうたわ。じゃが根性だけはみあげたもんじやのう。

ほかの群れとのなわばり争いもあつたが、わしらの群れにかなう群れはなかつたんじや。けつきよく群れごとわしらの群れに入り込むことになつて、群れはどんどん大きくなつたんじや。

わしのボスは、戦いには強かつたんじやが、じぶんの体の中から攻めてくる敵には弱かつたんじやよ。

わけのわからん病気になつてしもうてのう。どんどん体は弱つていつて、ついに自分の寿命をさとつたんじやろう、わしもしらんときに姿を消してしもうたんじや。それつきりじやつた。

じやつぎの日には、もうわしにいいよるもんがなんぼうもおつてのう。くよくよしとるひまなんかありやせんじやつた。わしのまえで、だれがつぎのボスになるかのひっしののたたかいはじまつたも

んじや。たたかいに勝ったのはからだの大きなやさしそうなやつだったが、あたまはあんまりきれるほうじやなかつたよ。

これはわしの勘なんじやが、そいつは何年かまえにわしが生んだ子の中の一匹らしいのじや。とにかく気のいいやつじやつた。そのわしにとって二代目のボスは、鉄砲に打たれてけがしたところを、人間どもがつれている犬に食いちぎられて死んだんじや。

そのころ、ずいぶんたくさんの群れのなかまが鉄砲や網にかかっていったもんじゃないや。大きかったわしらの群れもかなり小さくなつたし、よそじゃ群れぜんぶが捕まつてしもうたいうのもあつたらしい。ボスがあほじゃと、そういうことになるんじゃないや。

そういうときは、うかつに人里に近づけんし山に食いもんが少なきときなんか、群れの中であまり強くないもんは飢え死にしたりもしたもんじゃないや。

でもそういうときを生きのこつたんは強いもんばかりで、けつきよく群れは、強い群れとしてまた大きくなり始めたんじゃ。もつとも、わしもその苦し
いころにはずいぶん何回も自分の子供を死なせたよ。
ろくに乳も出んかったけえのう。

わしの三代目のボスが、さつきはなしたように逃げおくれた子ザルを助けようとして網にかかった大ボスなんじゃよ。その子は、わしらの子じゃあなか

つたんじやが、あんな強くてやさしいボスはほかにや聞いたことがないよ。

けつきよくわしらサルの群れは元気なもんや、これからの若いやつや子供たちのもんや。なにかにつけて新しいやり方を見つけては、それを怖がらずにやりはじめるんは、なんちゆうても若いもんだちなんや。川ん中に落ちとる食いもんを、水にとび

込んでひろいはじめたんも若いもんじゃし、どろがついた食いもんを水で洗ってから食うたんもじゃ。そういういいことは、若いもんや子供たちは、すぐに真似しはじめよるわ。それにくらべて年よりはなかなかじゃな。でもわしもじゃが、メスはあるがいやってみるけどな。年寄りのオスがそういうことはいちばんだめじゃのう。

年とつても、元気にみんなといっしよに山をとび

まわったり、木の実をほかのサルより先に見つけて食えるくらいのができるうちは、何のえんりよもいらんのじゃけどなあ。

わしらの群れじゃ、自分の子供に食いもん見つけてやったり、子供がびようきになったりしたときにや自分は飲まず食わずでも世話するのがあたりまえじゃが、いったん一人前のサルになったもんはいっしょう自分のことは自分ですることになつとるんじ

や。

そういうことはサルじゃなくても、わしやあんまり好きじゃないんじやがイノシシやクマでも山の生きもんみなはそうよ。そんなことは、わしがいわんでも作家先生なら百も承知じやろうが。あんたら人間の世界でも同じじやろうけえ。

でもようわからんことがあるんじや。わしらの山から畑に食いもんいただきに行くときちゆうに、大き

な新しくてきれいなたてもものがあるんよ。そこを通るときみると、まどの中はいつも明るくてんきがついていて、たくさんの人間どもがうごきまわつとる。そういう大きなたてもものが人間たちの村にはほかにもあることも知つとる。

そういうところはちよつと変つとるんじや。何が変つとるかいうと、やたらに年寄りの人間がいつぱいいるんじや。そいつらあみんなのそのそ動きよる。

なにかにつかまって歩いたり、なんかにすわったまままで動いとるもんもいる。すわったままでだれかにおしてもらつとるもんもいる。

そこには年寄りじゃない人間もけっこういる。年寄りじゃない人間はたいいピンクのふく着とるよ。そのピンクのふく着た若そうな人間がいそがしそうに走りまわつとるんじや。そのとしよりの人間たちがメシ食つとるのも見たことあるんじやけど、ピン

クの人に食わしてもらつとるもんもいるんじや。どうもわしらには、あの人間たちが何しとるんかようわからんのじや』

僕は、このサルに人間の言葉が通じるかどうかわからなかつたが、少し説明してみた。

あれは老人のための建物で、弱ってしまつて自分のことが出来なくなつた人間の世話をして、その人

たちが少しでもよい生活が出来るように手助けして
いるのだと。僕たち人間は仲間が弱つても見捨てた
りしないのだと説明した。

山ザルは、僕の言うことがわかったのかどうか、
また自分の話を始めた。

『おしらあ、子供を生んで育てたら、あとは群れの
もんに生きていく知恵をおしえるくらいのことでは

かには用はないんじや。ただ、ボスとして群れをきけんな目にあわさんようにしたり、新しい食いもんの場所を見つけてやったり、なかまどうしのいさかいを止めてやったりできるもんは、群れにもそうざらにはおらんよ。それがボスにはできるちゆうことなんじや。ボスともなるとほかのやつらとはちがうんじや。

それでも、わしらあみたいに大きな群れじやボス

一匹じや大變じやけえ、ボスを助けるもんも何匹か
おるんじや。そういうもんは年取つても、わしの大
ボスみたいに、群れのために体を張つてはたらくし、
群れのもんからもたよりにもされるんじや。

とにかく、用もなく、自分のめんどうも見れんよ
うになつたもんは、群れのだれもめんどうなんか見
てくれんで当たり前なんじや。わしら年寄りザルで、
若いもんにめんどう見てもらおうなんて思うとるも

んはおらんよ。若いもんは若いもんで自分が生きていかんにやならんし、子供を育てんにやならんけえの。作家先生のはなしじゃ、あのたてもの中じゃあ、自分のことが出来んくなつた年寄りの人間が若い人間に世話されてるいうことらしいけど、その年寄りたちは、そんなことされて恥ずかしくないんかのう』

僕の話は通じたらしい。僕は、老人が恥ずかしい

かどうかといつても、それもわからないうような病氣
なんだから仕方ないじゃないか、と付け加えた。

『人間はわしらよりえらいそうじゃけえ、何でもで
きるいうことじゃないんか。じゃつたらそんな病氣
くらい治せんのかいな。あんがいたいしたことなん
じゃの。まあ人間どものことはどうでもいいんじゃ。
わしものう、つれあいが死んだりしたときは悲し

いもんなんよ。でも、いつまでも悲しんでなんかおれんけえのう。これからの生き方を見つけんといけんのじゃけえ。

わしは何匹生んだかわからんくらい子供がおったんじやが、ひとりで生きていけるようになるまで育つたのはそんなに多くないんじや。ずいぶん辛い思いもしたもんよ。その辛さといつたらつれ合いが死んだときどころじやないけえのう。わしの乳が出ん

かったり、なぜかものを食わんようになって死んだり、群れの若いオスにいじめられて死んだんもいたんよ。若いオスちゆうのは、子供がオスとみるとやつつけたくなるものらしゆうて、わしの子もよくいじめられたもんじや。たいていはいじめに来るやつを追っ払ってやるんじやが、たまにはひどい目にあわされてしまうこともあるんじや。子供の死に目にはなんかいあつても辛いもんじや。

死んだ子供を十日も二十日も、長いときにや三月も抱いてはなさんもんもいる。抱いとつても、すぐに腐ってウジがわいてくるし、臭くてだれも近づかんようになるんじやが、はなすことができんのじや。わしの群れには、そうして自分も飢え死にしてしもうた若い母親がいたもんよ。

ところで作家先生は、いまわしがどうして一匹だけでここにいいのか聞きたそうじやね。ちよつとわ

しについてきんさい』

どうもさつきから話を聞いていると、この山ザルは僕が作家であることを知っている。人間の世界では、いくら僕が渾身の力を注いで書いたものも、いっつこうに評価しようとしなのに、みるものが見ればひと目で才能はわかるものだということが証明されたような気がする。

山ザルは僕を手招きしながら草ぼうぼうの中に入
っていった。サルは低い木の枝の下や、草をかき分
けて平気で歩いていく。サル道はあるのだが、サル
よりずっと大きい僕にはひどく歩きにくい。枯れ枝
や棘で傷だらけになりながら僕は必死でついていつ
た。サル道からも外れた草叢のところで山ザルは立
ち止まって、僕にそこの地面を指差した。なんとそ
こには、人間の白骨がたくさん散らばっている。い

や、人間のものにしては小さすぎる。サルの骨だ。頭蓋骨みたいなものもあるが、ほとんどは風化しかかっている。風化というより何ものかに食いつくされているようでもある。

山ザルは、僕を促して草叢から出ると、さつき話していた場所に戻って、また話し出した。

『わしももうしばらくしたらああなるんじや。もう

わしのためのいい場所を見つけてあるんじや。その
ときがきたら、自分にはわかるもんじや。そこに行
つて、地面を寝心地よくととのえて静かに横になる
んじや。よるは長いし、ひるも腹がへってなかなか
眠れんらしい。だからなるべく冬がいいんじや。そ
れも寒けりやさむいほどいい。はやく眠れるらしい
からな。べつに怖くなんかないよ、生きとるもんは
みんなさいごはそういうときがくるんじやけ、あた

りまえのことなんじやよ。

わしらあ、夜がきたら眠り朝がきたら起き、腹が減ったら食い物をさがす、その季節がきりや、オスとメスはむしように恋しゆうなる。そのためにオスたちはメスを取り合つてあらそう。メスにしてみりや弱いやつよりも強いやつがいいに決まっているもんね。強いオスなら生まれる子供も強いちゆうわけよ。それもこれも生きとるうちはあたりまえにやつ

てくることなんじゃ。

年をとつたり、そうでも病氣やけがで自分の寿命を感じたもんは、いまのわしと同じようにするんじゃ。わしら山に住むもんの世界じゃこのやり方がうまくいっとるんじゃ。自分のことが自分できんようになつたようなもんが、若いもんたちにめんどうかけるのはまちがうちよる。わしら山のもんは、みんな自分の身のしまつは自分でできるゆうこ

とじやな。

ここみたいな山にはうまいぐあいに掃除屋もいてのう。そういうやつらは、わしらが息のあるうちに決めてかたづけにきたりはせんのだじや。でも死んでしもうたらさつき見てもろうたとおりになんじや。このへんじやあ、もつともつとたくさんのなかまが死んでいったんじやが、そのわりに骨が少ないと思わんかったかね。山んなかちゆうもんはうまいぐあ

いにできとるもんじやろう。

ことしこのへんは雪が早いような気がするから、
わしは運が良いんじやろうな』

山ザルは、話し疲れたのかしやべるのをやめた。
あらためてよくみるとかなりの年寄りザルみたいだ。
体中の毛には白髪が混じっているし、頭の毛もやけ
に薄くなっている。眉は目にかかるとい長く伸び

ている。目も悪いみたいで、片方は白くなつてしまつてゐる。もう一方の目も、眼光はすっかり衰えて、その目にはもう何の気力も欲も宿つていないように見えた。

話し終わった山ザルは、ぼんやり遠くを見るようにしてゐたが、しばらくして近くの落ち葉の中に木の実を見つけて口に入れた。もぐもぐしてゐたが上手に空だけをペツと吐き出した。僕のほうをチラツ

と見たがもう何も喋らなかつた。それはもう話は済んだから、一人にしてくれといっているみたいだつた。

僕は静かにその場を離れた。そのとき思わず別れの挨拶のつもりで会釈をした。長いこと話をしてきた人間と別れるような気がしたものだから。山ザルは何のことじやいという顔をして、もう一度チラツと僕の方を見たが、すぐに二、三步向こうの方に動

いて木の実を拾って口に入れた。

(完)

編者あとがき

著しくIT技術の発達した今日、かつて発表の機会に恵まれなかった無名アマチュア作家に大きなチャンスが到来しました。昨年末のAmazonのペーパーバック進出はさらに力強い追い風となっています。

故山中與隆は、定年後すぐに退職し、アマチュア

としてチェロを弾いて室内楽を好きなだけ楽しみな
がら第二の人生を過ごしておりましたが、それと同
時に、作家になることを目指して文筆を続けると宣
言し、毎年のように懸賞に応募していたようです。
それは近年まで続けられていたことがパソコンの中
身から分かりました。傍におります妻の私は、とう
に文筆を止めてしまっていると思っておりますの
で、それを知って愕然としました。

ここに、山中與隆が書き残しましたものを順次発表していこうと決心しました。なんらかのきっかけで本作品をお手にとって頂けたご縁を嬉しく思います。今後発表する作品にもご期待下さい。

またブログ ([URL:https://www.duoyamanka.com](https://www.duoyamanka.com))
への投稿の形でも発表していきたいと考えております

すので、あたたかく見守っていただければ幸いです。

二〇二二年四月

山中伶子

※1 山中與隆（やまなかともたか）の名前についで

與隆の「與」の字は「与」の旧漢字です。従って、入力時に「よ」で変換をかけると、下位ではありませんが、表示されません。

著者紹介

山中與隆（やまなかともたか）

一九三九年～二〇二一年

「名古屋生まれ、広島大学卒。小学校の教員暦七年、その後一般のサラリーマンを三〇数年。いまはリタイアして悠々自適の生活を享受中。大学時代に始め

た弦楽器（初めはヴィオラ、その後チェロ）を今も
続けている一方、小説や随筆の執筆にも力を入れた
いと思つています。

書くものとしては文学的なものから推理もの、歴
史もの、恋愛もの、ファンタジー、社会派的なもの
などジャンルを選びませんが、常にベースには何ら
かの形で音楽が絡んだものにしたたいと考えています。
ライフワークとしたい目標は、音楽を前面に出し

たもので読者の方々に小説としての読み応えと、そこに登場する音楽を是非聴きたいと思ってもらえるような、しかも私の著述によつてその物語にも音楽にも感動してもらえらるような作品を完成させたいと思つています。」

著者プロフィール(二〇一〇年五月)より

今後の出版予定作品

今後は、既刊の電子書籍のペーパーバック版を出版の予定です。

既刊作品

|| 電子書籍 ||

『都志見往来日記』 異聞

コンサートは開かれた

さまよえる視察団

蒸発の衝動

インテルメッツォ

爆発

妻が消えた

既刊の短編

アマールスを聞く男

オセロー

テンペスト

定年の晩

魂の三重奏

ロシアンルーレット

ささゆり

才能移転

ある三文作家が見たもの

けんか

袖ふれあうも

ミスターフエイト

峠を越えて嫁入りした女

花火見物

ある小学校教師の敗北

三坂峠 二話

第一話 《お蓮・勘兵衛 悲恋の墓》

第二話 《緑のトンネルで》

阿弥陀山

ゴーシユの華麗なる転身

ある男の臨終

野の寂しさ

四重奏

親も子も老いて

わしや、ただの山ザルじや

リヨウコからの電話

カルテットのあゝ風景

「オセロ」の手紙版

出来る間に、出来るだけ

なぜ？

紀行文

広島百山と吉和冠山登山

ひとり、山を歩く

短編シリーズ String Fiction Series

1 弦楽四重奏団 a

2 弦楽四重奏団 b

3 親和力

- 4 トリオ・ソナタ
- 5 不協和音
- 6 解散
- 7 音楽のある生活
- 8 ビオラを弾く生活
- 9 疑問
- 10 生きがい
- 11 激情

12 カルテット

最終三作品

裸の王様は何処へ行く

むかし俺がクマだったころ

ある兵士の物語

Ⅱ既刊のペーパーバックⅡ

『都志見往来日記』異聞

コンサートは開かれた

さまよえる視察団

短編集テンペスト他

短編集2―ある三文作家がみたもの他

短篇集3―ミスターフェイトほか

わしゃ、ただの山ザルじゃ

2022年9月20日初版発行

著者：山中與隆

編集：山中伶子

表紙素材元：www.photo-ac.com

・タイトル：ニホンザル

作者：ハーブティさん

写真のID：24263773

・タイトル：山梨：西沢溪谷

作者：私の小さな幸せphotosさん

写真のID：24616329

・タイトル：男子旅

作者：アイコねえさん

写真のID：912759

©Tomotaka Yamanaka 2022

<https://www.duoyamanka.com>
